

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

26

第三五回受賞作品（一九九四年）

宮崎県立芸術劇場

後編

前編では宮崎県立芸術劇場が県の一大文化拠点を担う文化施設の一つとして計画された経緯を紹介した。後編では精度の高い設計を具現化した施工の工夫、また芸術劇場を特徴づけるクラシック専用ホールを、国内外の最高レベルの音楽に親しむ場に育てた運営努力を紹介する。

本物の音楽体験をもたらす コンサートホール

宮崎県立芸術劇場は設立時の県民が国際的にも最高水準の音楽、演劇に親しむことができるホールにするという理念のもと、クラシック音楽専用のコンサートホールをメインに三つのホールで構成されている。本物に触れることの大切さは芸術を始め、多くの分野で語られている。「宮崎にはクラシック音楽が根付いていませんでした。専用ホールができることで一流のオーケストラが来るし、本物の音を聴くことができます。県民自身も素晴らしい場所で合唱し、

演奏する体験を通して、音楽に親しむようになりました」。同劇場の福田稔総務課長がコンサートホールの中へと案内してくれた。初めて見る者は誰もが息を飲むことだろう。天井まで大きく吹き抜けたステージの三方にバルコニー席が設けられ、空間全体が深い一体感で充たされているようだ。同時に広がる木の質感には圧倒される。壁の仕上げ面と客席の木部には宮崎県産の銘木である綾町のケヤキ、床にはミズメザクラが使われているという。

「ホールそのものが楽器のようです」と語る福田課長。リハーサルの準備中で観客がいない静けさ



音楽監督として宮崎国際音楽祭の発展に尽力した世界的なバイオリン奏者、アイザック・スターンの名が、平成14年、コンサートホールに冠せられた。

コンサートホールの音響設計は、1/10の模型を製作し、実験とコンピュータシミュレーションを併用して、音響工学上の検討がなされた。音の検証には模型規模に合わせて周波数変換をするなど、さまざまな技術が駆使された。



上／コンサートホールの両側の壁面は音響効果にも配慮して山形の斜面でデザインされている。オリジナルデザインの照明器具も反射板の働きを持っている。

下／1階の舞台裏の廊下。並列するホールの背後に16室の楽屋が一直線に並び、たいへん使いやすい。右手に舞台出入り口、左手が楽屋と楽屋ロビー。西端は大道具の搬入口。

た南野徹氏（飛鳥建設株式会社）が当時を振り返る。「音響効果を高めるために、長手方向のバルコニーの壁面の納め方と、天井の仕上げ形状をそれぞれ当初の予定から変更することになったのですが、いずれも工場組み立ての手法を取り入れ、工期に影響をささず仕上げることができました」。バルコニー両サイドの壁面は、斜面を組み合わせて山形のデザインが施されているが、音響上の配慮からコンクリートで形成した躯体と仕上げの形状を一致させる必要があった。複雑な形のコンクリートを打つには型枠形状も複雑になる。現場でつくり出すれば材料を切断

する手間も多く、効率が上がらない。それをクリアし、精度よくできたのは、工場で型枠をパネル化してコンクリートを打ち、現場で組み上げるだけで済んだからだ。「宮崎の型枠大工がたいへん優秀な人たちで、早くから型枠のパネル化に取り組んでいて、斜め形状にも応用を利かせてくれたのです」と南野氏。職人の技術レベルの高さが強く印象に残っているという。

地域と交流を図り、ものづくりの魅力を伝える

施工全体については、建築の規模の大きさに対して全体の工期が短かったため、省力化をテーマと



右/1992年5月頃の施工風景。大階段より光のプラザを臨む。手前がコンサートホールで、奥に見えるイベントホールは鉄骨建方が完了している。

左／パイプオルガン組立ての様子。国産最大の66ストップ（音栓）。横笛を再現した「篠笛」は宮崎ならではの音色。（提供：宮崎県）

の中、靴音が心地よく響いてくる。ホールの形状は「シューボックスタイプ」。靴箱を意味する直方体の空間で、世界三大ホールのひとつといわれる「ウィーン楽友協会大ホール」が知られている。

音響最優先のこだわりを実現した施工の工夫

設計者である佐藤総合計画は、ヤマハ音響研究所の協力を得て、欧米の著名なコンサートホールの科学的な音響データをもとに、さまざまな検討を行い、音響最優先でコンサートホールを設計。縮尺一〇分の一の模型をつくっての音響実験やコンピュータシミュレーションにより、室内形状、最適な大きさなどが導かれた。当初二、〇〇〇席を予定していた席数は、佐藤総合計画の提案で一、八八八席に絞られ、それに最適な残響時間を約二秒にすることで、十分な音量と豊かな響きの両方を実現している。並行して、障害となる反射音や吸音に配慮した設計・施工に神経が注がれた。

建築工事JVの現場所長を務め

施工者より

九州の職人の技術の高さと努力が優れた建築を実現させました



飛鳥建設株式会社
宮崎芸術劇場建築JV作業所長（当時）
南野 徹 Tomu Ninamino

建設が始まった一九九一年当時は全国的な建設ラッシュで、労働力がたいへん不足していました。確保が難しいと分かっていたので、宮崎県内の協力会社を中心に、九州全域から優秀な技能者を集めて施工に臨みました。建築の躯体も仕上がりもグレードが高く、納まりの精度も当時の最高レベルでした。全体工期も二七カ月と短かったため、工期を厳守するには、工事の省力化を中心に多くの工夫が必要でした。とくに地下工事は一〇カ月と工期の三分の一を占め

るので、予定通りに行くことが重要でした。大淀川の地下水の影響を受けることが予測されたので、山留壁から水が浸入しないように、止水性の高いSMW工法を採用しました。さらに地下の仮設工法は、躯体工事のしやすさを優先して決めました。鉄骨梁を架け渡す「切梁」ではなく、敷地周囲にアースアンカーを打ち込み、山留壁を外側に引き付けるのです。地下工事はスケジュール通りに進みましたが、地上に建物の形が見えるまで期間が長いので、県の方々が工事が遅れていると心配されたことがありました。大丈夫ですと説明したことも思い出の一つです。

コンサートホールの柿落しの前には施工関係者を含めて演奏会を開いてくださいました。演奏が始まると、ホール全体が音楽を奏でているような感動が走り、それは何物にも換え難い施工者冥利に尽きる経験となりました。

管理・運営者より

巨匠たちに愛され人を育てる場に成長しました



公益財団法人 宮崎県立芸術劇場
理事兼名誉館長
青木 賢児 Kenji Aoki

私は宮崎市の出身で、NHKで報道番組のプロデューサーなどを務めた後、NHK交響楽団の理事長になりました。音楽のプロではないため、五年間N響と国内外をコンサートツアーで回りながら、勉強させてもらいました。初めはN響の活動と兼務で館長を引き受けました。ホールの運営は次から次へ機械的に演奏会を開けばいいというものではありません。オーケストラの人たちと人間的な交流を深めることで、ホールも、その地域も印象に留めてもらうことが

大切です。無名で実績もないこのホールを広く知ってもらうために、開館から二年後に「宮崎国際音楽祭」を立ち上げることにしました。N響のコンサートマスターの徳永二男氏の発案で、バイオリンの巨匠・アイザック・スターンを呼びたいとニューヨークへ会いに行きました。運よく会ってもらえ、彼がいいという音楽祭へ行き、友達になりました。そこで彼を宮崎に誘ったのです。そのときに彼が興味を持ったのは、前に宮崎へ来たニューヨーク・フィルの女性マネージャーが、とてもいいホールだとスターンに話してくれたからです。それがきっかけで、彼は亡くなる二〇〇一年まで、音楽監督を務めてくれました。

現在も世界で活躍するスターンの弟子たちが来てくれます。いいホールがあり、多くの人たちが時間を共有することで、文化が培われていくのだと思います。



「宮崎国際音楽祭」に向けた、高校生の合唱練習風景。「宮崎国際音楽祭」は1996年3月に「宮崎国際室内音楽祭」として第1回が開催され、今年、第20回を迎える。一流の演奏家から県民にいたるまで、様々な音楽のイベントが連日行われる。（提供：宮崎県立芸術劇場）

して工事が進められた。同時に、地域とコミュニケーションをとりながら建設現場のイメージアップを図る企画が組まれた。閉鎖的に映りがちな仮囲いに、地元の幼稚園児に描いてもらった絵をデザインするなど、当時としては新しい試みで、明るいイメージづくりが市民に好評だった。毎朝、工事関係者がそろって周囲の歩道の清掃を行ったことも近隣から理解を得るきっかけになったという。見学会も頻繁に開かれ、建築系の学生を中心に、二年間で見学者数二、一六七人が記録されている。次の世代を担う若者に、ものづくりの魅力を伝えるチャンスとなった。

一流のオーケストラから 高く評されるホールに育つ

宮崎県立芸術劇場は一九九三（平成五）年十一月にオープンし、今年で二二年目を迎える。クラシックコンサート、演劇、イベントの三ホールはそれぞれの特徴が生かされ、七から八割の稼働率で利用されてきた。開館以来の入場者数は五二〇万人を超えている。こ

れまで開かれたクラシックコンサートのリストを見ると、国際的に著名なオーケストラや指揮者、演奏家が多いことに驚かされる。ウイーン・フィルと小澤征爾、モントリオール交響楽団とシャルル・デュトワ、イスラエル・フィルとズービン・メータ、国内の交響楽団や演奏家もずらりと顔を揃えている。「世界で一流と言われるオーケストラは二二〇―一三〇あります。そのうち三〇ほどのオケを宮崎に呼び、多くの方々に体験してもらうことができました」。わかりやすく解説してくれるのは、開館以来、二〇年間運営に尽力してきた青木賢児名誉館長である。「自分たち

の音が客席にどのように届くか一番よく知っているのがオケの人たちです。お世辞など言わない人が多いんですが、彼らがコンサートホールを絶賛してくれるんです」。その評価が、ほかの一流のオーケストラの来演につながっていくのだという。一九九五年から宮崎国際音楽祭を立ち上げ、若手の音楽家育成の場としても芸術劇場を展させてきた。一方で、コンサートホールは県内の高校生が懸命に練習を重ね、合唱コンクールを行うなど、身近な場所としても定着している。南国の都市の音楽体験は、これからもさまざまな可能性を生み出していくだろう。



上／演劇ホール。舞台から客席を見る。演劇にふさわしい音響設計が行われている。演劇のほかに室内楽やジャズ、ポップミュージック、邦楽などのコンサート、舞踊、講演会・研修会など用途は多様。

下／地下1階に大中小合わせて10室の練習室があり、頻繁に利用されている。遮音性を考慮して配置され、2室は完全浮き構造でロックバンドの大音量にも対応する。